

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	阪井, 裕一郎(Sakai, Yūichirō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.91- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

阪井 裕一郎

本書を取り上げてくださった三田社会学会編集委員会と、本書の内容を丁寧かつ的確に要約しながら本書の意義をお示しいただいた、吉武理大先生に心より感謝申し上げたい。

以前読んで感銘を受けた、武田砂鉄さんの著書『父ではありませんが、第三者として考える』（集英社、2023年）にとっても印象に残った記述がある。喫茶店にひとりしていると隣の席の子どもが大きな声で泣いている。自分はまったく迷惑だと思っていない。しかし、隣の母親は迷惑がかからないようあたふたし、仕舞には子どもを抱え外に出ていく。自分としては「そのままでもいい」と思う。でも、伝える手段がなくもどかしい。いっそのこと「どうぞ泣いてください」と書かれたプレートを掲げられたら楽なのに——。そんな内容である。

私自身、頻繁にこうした経験があるので強く共感するとともに、この文章から「私たちの社会にはこういうことがたくさんあるよな」と、さまざまなことに思いがめぐった。

唐突になぜこんな話をしたかといえ、この社会には、傍からみると「冷たい人」に見えてしまうけれども、本心は必ずしもそうではない、というケースが多くあるように思うからである。この日本社会を「子育てに冷たい社会」とか「多様性に冷淡な社会」という言葉で一括りに断ずることがある（実際私も頻繁にこう思うし、そういう面はもちろんある）。だが、これは必ずしも妥当ではなく、もっと丁寧に考えてみる必要があるのかもしれない——。けっして「冷たい」わけではないが、適切な行動や言葉が分からないがゆえ、あるいは、周囲を気にしてしまって、「何かしたい」と思いながらも沈黙せざるをえなかったり、手を差し伸べられずにもどかしい思いをしたりする人が多くいるのではないか。

本書のテーマ「結婚」をめぐってもこれと似たような事例はたくさんあるように思う。日々の生活や人間関係において、結婚をめぐって「もどかしい」けれどもうまく伝えられない。職場や学校、医療や福祉の現場、親戚関係など身近なやりとりのなかで、思いを言語化し、他人に伝える方法が分からない。多様な家族関係やバックグラウンドを有した人と接する機会が増えたものの、その接し方に戸惑う人も少なからずいる。いろいろ頭では社会を変えたい、変わってほしいと思いながらも、反対の声を恐れる、あるいは、どのように発言してよいか分からないという人も多くいる。

本書では、結婚をめぐる私たちの思い込みを疑うという視点から、これからの家族や人間関係のあり方について検討した。夫婦別姓や同性婚など、多様化する結婚への注目が高まる一方、これらの問題が世間ではまだまだ正しく理解されていないことに対する私自身のもどかしさも本書執筆の大きなモチベーションの一つであった。本書が、結婚をめぐって「もやもや」を抱える人たちが、自分なり

に問題を整理し、言語化できるようになるための手助けとなること。それと同時に、これらを「思いやり」のような個人の努力の問題に帰するのでなく、社会の側が個々人の行動をエンパワメントするように変わっていく必要があると示すこと。「新書」という多くの人に読まれる媒体で執筆機会を得た以上、少なからずそのような思いを込めた。

吉武先生が、本書は「想定される疑問にも言及しながら」執筆されていると適切にご指摘くださったように、本書の執筆は、日々学生から、あるいはメディア上のやり取りで頻繁にみられる、疑問や批判を念頭において想定問答を繰り返しながらおこなわれた。本書が結婚や家族をめぐる論理的で建設的に議論をおこなうための「土台」を提供できていればと願っている。

吉武先生ご指摘のとおり、本書は私が専門とするテーマについては調査の具体例を交えた記述になっている一方、その他の部分ではやや具体性を書く部分もあり、全体を見るとアンバランスな構成になっている点は否めない。特に、重要な論点である親子関係や子どもについての言及が不十分だったという自覚があり、この点の記述については別の機会にあらためてチャレンジしたいと考えている。

親子の問題ということで言えば、もう少し踏み込んでおいてもよかったと思うのが「親権」である。リプライからは少し逸脱してしまうが、最後にこの場を借りて若干の補足をしておきたい。

本書の執筆を終えてから刊行までの期間に、離婚後の「共同親権」をめぐる法案が世間をにぎわしていた。そのタイミングで刊行されたこともあり、著者としては共同親権に対する自身の見解をもう少し明示してもよかったと多少の心残りがあった。

ここで共同親権について詳細に論じるのは適切ではないため控えるが、この問題は本書が主題とする多様なパートナー関係や家族関係とも密接に関連するため、今後の重要な検討課題だと考えている。

昨年成立した民法改正に対する批判や懸念、危険性について、私自身も問題意識を共有していることを前提の上で、単独親権と共同親権の二つを並べ、後者を「悪」とみなすような風潮（同時に、これまで共同親権の重要性を論じてきた家族研究者たちが一様に「保守的」「反動的」かのように否定されるような風潮）には驚きを隠せなかった。親権をめぐる戦前から戦後の歴史的経緯（最も基本的な話で言えば、単独親権は家制度に由来し戦後に婚姻時の共同親権が認められたこと等）や、共同親権をめぐる問題の複層性（例えば海外の共同親権をめぐる動向や親権概念の変遷）を捨象した単純な「善悪」の構図には違和感と危惧を抱いていることだけは述べておきたいと思う。そもそも親権は「親の権利」ではなく、親が子に果たすべき社会的責務であるという基本的事実も押さえてはいけないし、従来の離婚後単独親権の規定が内包する保守性にも目を向ける必要がある。離婚や再婚家族のみならず、事実婚や同性婚にも親権は関わってくるのであり、今後ますます冷静かつ精緻な議論が必要になる問題である。

いずれにせよ、親権の是非について、単独親権か共同親権か「○か×か」のような二項図式で断ずるのは妥当ではなく、これからの結婚や家族、ケア関係を考えるうえで建設的な議論の蓄積が必要である。本書で詳しく扱った選択的夫婦別姓や同性婚の議論と同様に、単純な対立軸でとらえるべき問題ではなく、その歴史的経緯や多層性をふまえた丁寧な議論が求められている。

(さかい ゆういちろう 慶應義塾大学文学部)